

「東アジアの動物—やきものと漆—」展によせて

祥瑞としてあらわされる動物の表現

東洋の美術作品では、様々な動植物が祥瑞(良いことのしるし、吉兆)やおめでたい意味を持つものとしてあらわされています。「蒔絵蓬菜文瓶子」(図1 日本・室町時代 大和文華館所蔵)には黒漆地に朱漆で鶴・亀・松・竹が描かれ、「白磁青花十長生文八角瓶」(図2 朝鮮・朝鮮時代 大和文華館所蔵)には鶴と亀、鹿、松、竹などが長寿の意味を持つ動植物としてあらわされています。

亀は四霊にも含まれ、『礼記』『礼運』には次のように記されます。

・「麟・鳳・亀・龍、謂之四霊。故龍以為畜、故魚鮪不滌。鳳以為畜、故鳥不獮。麟以為畜、故獸不狘。亀以為畜、故人情不失。」

(麟・鳳・亀・龍、これを四霊という。龍を畜とすれば、魚は驚いて逃げたりしない。鳳凰を畜とすれば、鳥は驚いて飛び立ったりしない。麒麟を畜とすれば、獣は驚いて走ったりしない。亀を畜とすれば、人情は失われない)

・「故天降膏露、地出醴泉、山出器車、河出馬図、鳳凰麒麟皆在郊俎、亀龍在宮沼、其余鳥獸之卵胎、皆可俯而窺也」

(それ故に天は甘露を降らせ、醴泉を涌出させ、山は器や車を出し、河は馬図を出し、鳳凰・麒麟は皆、郊外の叢に

あり、亀・龍は宮中や沼にいる、そのほか、鳥獸の卵胎[巢所]を皆、俯して窺うのである)

龍・鳳凰・麒麟はそれぞれ魚や鳥、獸の長とされて、亀は四霊の中の扱いがやや異なっているようですが、亀を含めてこれらが現れることは祥瑞とされます。馬図は河図のことで、伏羲の時に黄河から現れた龍馬の背に描かれていたという図を意味し、聖王が天命を受けて君主となるときに出現するという祥瑞を指しています。亀は髭のように長い毛を持つ姿であらわされることもありますが、四霊の中では実在の生き物である点にも注目されます。

また、『宋書』『符瑞志』には次のように記されます。

「靈龜者、神龜也。王者德澤甚清、漁獵山川從時則出。五色鮮明、三百歲游於葉葉之上、三千歲常游於卷耳之上。知存亡、明於吉凶」

(靈龜は神龜である。王に徳があれば山や川で漁や狩りの時に現れ、彩は鮮明である。三百歳になると蓮の葉の上で遊び、三千歳になるとミナグサの上で遊ぶ。存亡を知り、吉凶を明らかにする)

亀が長寿であること、祥瑞とされたことが述べられます。さらに、吉凶を明らかにする亀は亀甲を用いて吉凶を占うこと

と繋がり、亀占が重要な意味をもったことがうかがえます。

「高士彈琴八花鏡」(図3、部分拡大図 中国・唐時代 大和文華館所蔵)では、鏡背の中央に付けられた紐を通すための鈕が伏せた亀を象り、鏡背文様と組み合わせて、水から伸びた蓮の葉に乗る姿で、まさに靈龜をあらわしています。このような蓮の葉の上に乗る亀の姿は、敦煌文書の「瑞応図卷(Pelliot No.2683)」(図4 中国・唐時代 フランス国立図書館所蔵)に描かれています。この図卷は唐時代の写本と考えられており、前述の『宋書』『符瑞志』などの典拠を引用して瑞応(めでたいこと)に応じて現れるしるし)が図と文字で記されています。図卷は一部を欠失していますが、亀のほか龍と鳳凰の図が残され、その中には「河図」の他に、「黃龍」(図5)が水から躍り出て、「工」字形に四肢を開き、尾を伸ばす龍として示され、まさに正倉院宝物中の「八角鏡 金銀山水八卦背 第1号(南倉70)」の鏡背に線刻された龍の図像と酷似します。この鏡では、幽玄な山水風景の中で琴や簫を奏する人物の前に鳳凰が現れ、上空には鶴が飛翔する神仙世界があらわされています。楽器を奏する人物は琴や簫の名手として伝えられる春秋時代の伯牙や簫史、王子橋が相当すると考えられます。ここでの龍は祥瑞として現れる姿が示されると考えられます。靈獸は天意をあらわす祥瑞としての役割を担っていました。

また、造形物の中に最も多くあらわされてきた生き物といえば、鳥ではないでしょうか。花卉や樹木と組み合わせられた花鳥図として、龍や狻猊(獅子)、鳳凰などの想像上の靈獸と組み合わせられ、または千鳥のように愛らしい鳥の象徴として図案化されるなど、鳥の種類やその性質に応じて、変化に富んだ多様な図像が生み出されてきました。鳥は良い知らせを運び、また観音の使いや神の使いと捉えられることもあります。想像上の靈獸から身近な鳥まで、様々な生き物に良いしるしや意味が見いだされ、東アジアの美術は彩られてきました。

大和文華館でも、清々しく、美しい鳥の姿を見ることが出来ます。駐車場の脇に建つ文華ホール正面と裏側の出入り口の欄間に飾られたステンドグラスには、銀杏の木に戯れる鳥の姿が柔らかい描線であらわされています。この建物は明治42年(1909)に建てられた奈良ホテルの球戯室が大和文華館の開館時に移築されたもので、欄間のステンドグラスは屋内への柔らかな光を取り入れるとともに、彩りある楽しい空間を演出する要素となり、見上げる人に良い報せを運んで来てくれるようにも見られます。(瀧朝子)

※図4・5は松本榮一「敦煌本瑞應圖卷」『美術研究』第184号より使わせていただきました。



図1



図2



図3



図4



図5

季刊 美のたより No.219

令和4年7月1日

発行 大和文華館